

中等部第1回

国語

令和8年2月1日実施

50分

2026年度

〔受験上の注意〕

- 一、問題は〔一〕～〔三〕まであります。
- 二、解答時間は五十分です。
- 三、解答用紙はこの冊子の最後にあります。解答は解答用紙の所定のところに書いてください。
- 四、問題冊子・解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。

受験番号	氏名

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

高校一年生の立石のの花は、オンライン英会話をきっかけとしてフィリピンに興味を持つようになった。友人で、フィリピン人の継母と暮らす木原風羽の家で作ったスイーツに感動したのの花は、勇気を出して、文化祭のクラス企画で「フィリピンカフェ」の出店を提案するが、意見が通らず落ち込んでいた。しかし、クッキング部の部長である福島想太からフィリピンスイーツを教えてほしいとスカウトされ、風羽とともに入部することにした。

中間テストが始まった。

試験は午前で終わり、期間中は昼には家に帰ることができる。

あー、オンライン英会話やってるわりに英語の出来は微妙だったなあ。なんて思いながら帰宅すると、リビングではお母さんとおばあちゃんが昼ご飯を食べていた。

「あ、おばあちゃん来てたんだ？」

「のの花ちゃんおかえりなさい。里美とちよつと話したいことがあってね」

「十月におじいちゃん、頸椎の手術をすることになったんですって」

「えっ、大丈夫!? 頸椎って首でしょっ?」

「そんなに心配ないわ。おじいちゃんも歳だから、色々と不具合が出てくるのよ」

「ならいいけど……」

お茶のおかわり淹れてくるね、とお母さんが席を外すと、おばあちゃんが「そうだ」と私に向き直った。

「実はね、の花ちゃんにお願いがあるのよ」

「お願い？」

「私の代わりに、図書館祭りで昔話を語ってくれないかしら」

「えっ!? 何それっ」

「毎年十月にいつもの図書館でお祭りがあるの。本のリサイクルや映画の上映をするイベントで、私もそこでボランティアの仲間たちとおはなし会をしてただけけど……。今年は、おじいちゃんの手術の時期と重なっちゃったの。さすがに参加できないから……。代わりにの花ちゃんを語り手にスカウトしちゃおうと思ったのよ」

①「無理だよ、無理！」

百パーセント拒絶しながら、スカウトって最近もどこかで聞いたような言葉だと頭の片隅で思っていた。

「私、いつも聞いてるだけで語ったことなんてないもん」

あがり性の私がお祭りで語りを披露するなんて、人魚が徒競走に出るくらい不可能だ。

「大丈夫よ。十月四週目の土曜日だから、今から練習すれば、十分間に合うわ」

あれ、その日って……。

「ごめん、その日はクッキング部で、一日カフェをやる日なんだ」※

断る正当な理由がある。私はほっと胸をなで下ろした。

「まあ、クッキング部に入ったの？ カフェなんてすごいじゃない。昔話のことは残念だけど、楽しんでね」

その笑顔を見て、ちよつと胸が痛んでしまった。おばあちゃんの昔話への思いが強いことを知ってるからか

な……。

②「私は罪悪感を覆い隠すかのように質問をかぶせた。」

「その図書館祭りのおはなし会って、ふだんどう違うの？」

「ふだんのおはなし会の対象は子どもだけ。でも、年に一度の図書館祭りでは、大人の聞き手も大歓迎なのよ」

「え？ 大人？」

「昔話は子どもだけのものじゃないわ。五歳でも十五歳でも八十五歳でも、人はそのときどきの自分にあつたものを昔話から掴み取ることができるの。たとえば……昔話は主人公が一度はどん底になつても、自分なりのハッピーエンドに辿り着けるものが多いでしょ？ 大人になつたって、人生は悩むことばかりよ。そういうとき、昔話が力をくれるの。長い間、たくさん人の耳と心を通ってきた物語には、そういう力があると思うわ」

③「そう話すおばあちゃんの声はまっすぐで迷いがない。」

「そんな大事な機会なら、ますます私なんかじゃ無理だよ」

「無理じゃないわ。小さい頃から昔話に親しんでるし、それに声がとてもきれいだもの」

「え、別にきれいな声なんかじゃないって」

「あら、ほんとよ。の花ちゃんの声は聞いてて心地いいわ」

「ないない、そんなの言われたことない」

なーんて否定したものの。

褒められたせいかな、夕食のときもお風呂のときも、おばあちゃんの誘いが心にひっかかっていた。

気にしたってしょうがない。縁日のある日に、おばあちゃんの代わりになつてあげることができないから。

だけど……。

『五歳でも十五歳でも八十五歳でも、人はそのときどきの自分にあつたものを昔話から掴み取ることができの』あの言葉、正直ちよつと大げさって思った。

でもまあ確かに、私は高校生は今だって、おばあちゃんの家の和室で昔話を聞く時間が好き。

おばあちゃんの声のトーンや言葉のリズムに安心したり、ワクワクしたりする気持ちもウソじゃない。

もし、語り手が私でも、誰かにそんな気持ちになつてもらふことができるのかな……。

「ずっとむかし、フィリピンの島々が、まだスペイン人の手に落ちていなかったころ、」

気づけばベッドに寝そべりながら、「漁師の娘」の一節をそらんじていた。

学校で一人ぼっちだった私が繰り返し返し読んだ、あの昔話。おばあちゃんのマネゴトで音読していたから、何となく

覚えている。

(a)沈み込むように、私はそのまま眠りについていた。

中間テストは先週末で無事終了。

成績はパツとしないし梅雨明けもまだだけど、(b)雨音さえリズムミカルに聞こえる。

なぜって今日は初めての部活。オムライスを作つた後、一日カフェについてみんなでミーティングをする予定だ。

六時間目までは、部活への助走だと思つて乗り切れそう。

ただ、部活用に新しいエプロンがほしいとリビングで言つたときだけは、家族のリアクションにちよつとテンション下がつたけれど。

「この花がクッキングなんてどうしたの？ そうだ、タッパー持つてかない？ 余つたら持つて帰つてきてよ」

「ねーちゃんドジだから、初日からフライパン焦がして弁償じゃね？」

「おお、いいじゃん。女子は勉強より料理得意な方が得だぞ。花嫁修業だと思つて頑張れよ」

「もー、みんなほつといて！ ていうかお父さん、今の時代その発言はマジでアウトだから」

まあ、こんなことはスルーするとして。

「お！ 今日からだな。改めてよろしく！」

想太郎長の指示で、風羽ちゃんと私は、別々の調理台のグループに交ぜてもらふことになった。

「じゃあ、立石さん。玉ねぎのみじん切り、お願いしていい？」

「はいっ」

二年生の先輩に頼まれて、包丁を握る。

えーっと、みじん切りつてどこから切ればいいんだっけ。

手元はおぼつかないし、目は玉ねぎが染みて泣けてくる。

チラッと隣のグループを見やると、風羽ちゃんがトントントンとリズムミカルに玉ねぎを切つていた。見事な包丁さばき。

それに比べて私は……。家で料理なんてロクに手伝つてこなかったことがバレバレだ。

縁日までにはもうちよつと調理に慣れなくちゃ。

出来上がったオムライスを長机で食べながら、ミーティングが始まった。(私は早々にぺろつと食べ終わり、お母さんに持たされたタッパーの出番はなかった)

「フィリピンスイーツは、バナナキューとかフルーツサラダとかも人気ありますよ」
風羽ちゃんが紹介するスイーツをみんなはそれぞれのタブレットで検索し始めた。

「へー、フルーツサラダって野菜じゃないんだ」

「これがバナナキュー？ 串に刺さってるから、フランクフルトかと思った！」

「おいしそー。でも全部食べたらかロリーやばそー」

同級生も先輩たちも盛り上がりつついて、そんな反応の一つ一つが何だかうれしい。

そんななか一番人気を集めたスイーツは……。

「やっぱりハロハロじゃない!?!」

「カラフルで映えるし可愛いし」

「フィリピン発だって知らない人多いよね」

「ごちゃ混ぜって名前の由来もよくない?」

うわあ……Amazing! (すごいー)

みんなでフィリピンスイーツの魅力を話し合えるなんて。*
マダサリタでのノノカのテンションなら、部員たちに抱きつきたいくらいだ。

みんなの意見がまとまってきたところで、想太郎がドンッと拳で机を叩いた。

「よっしゃ、今年はハロハロ作りに決まりだな！」

「ちよつと待って」

矢崎先輩が渋い顔で口を開いた。

「懸念事項が二つある。一つは、これを縁日で作ってOKかってこと。地域の縁日で取り扱える食材や調理方法は、衛生面の理由から色んなルールがあるんだ。まあ、それは顧問の坂口先生に確認するとして……」

「もう一つのケネンは何だ?」

「材料費が足りるかかってこと。縁日では毎年予算五万円で二百食作らなきゃいけない。こんなに色んな食材を買ったら予算オーバーだよ。それに本場のハロハロって、紫色のウベのアイスを使うみたいだけど、入手が難しそうだし」

「それはたぶん大丈夫です」

そう言ったのは風羽ちゃんだった。

「ハロハロは、予算に応じてアレンジできますよ。確かにウベっていう紫芋のアイスが代表的ですけど、バニラと
かもありだし。フルーツも予算内で選べばOKです」

「あいつ、できればあんこも入れたいです！」

私は小さく拳手してつけ加えた。

「ハロハロは日本の氷あずきの影響もあるかもって教えてもらったんで……」

風羽ちゃんが「だね」と頷く。

「おお！ それならいけるんじゃないか、矢崎?」

「分かった、計算してみるよ」

「さすが。ここは頼んだぞ」

想太郎と矢崎先輩。この二人、見た目も性格も対照的だけど息が合うみたいだ。

「あとは、市民ブレイスの会場をどうディスプレイするかだな」

「すみません、あの、前から思ってたんですけど、市民ブレイスって……?」

「ああ、公民館って言えば分かりやすいかな。数年前に建て直して、今の名称めいしょうになったらしいよ」
今さらながら聞いた私に、矢崎先輩が答える。

話によると、一日カフェの会場は、市民ブレイスの調理室とその隣の多目的室。そこで調理と接客を行うことになっっているらしい。

「南国っぽいカフェにしたいくないですか? ヤシの木の写真とか飾かざって、アロハな感じ」

一年生の女子が言い、「アロハはハワイだし!」と矢崎先輩がツッコんだ。

「何かフィリピンっぽい雰囲気かんいき出せるものないかな。縁日はちっちゃい子からお年寄りまでたくさん来る。みんな楽しんでもらえる空間にしたいよな」

想太郎が腕組みうでぐみして考え込む。

そっか、縁日って色んな世代の人が来るのか……。

そのとき、記憶きおくの何かがリンクした。

『五歳でも十五歳でも八十五歳でも、人はそのときどきの自分にあつたものを昔話から掴み取ることができるの』

おばあちゃんの代わりに図書館祭りで語ることはできない。でも、もしかしたら私は私のいる場所で、昔話はおもしろいって誰かに伝えることができるかもしれない。

⑤ 気づけば私は口を開いていた。

「たとえば……フィリピンの昔話とかどうでしょう」

「昔話?」

「昔話って、その土地らしさが表れるんです。私のおばあちゃん、図書館で昔話を語るボランティアしてるんですけど、昔話って何歳の人が聞いても元気をもらえるって言うて……。あの私、もしよかったら会場の片隅で、フィリピンの昔話を語ってもいいですか? ほんの五分とか十分くらい、ハロハロ食べながら気楽に聞いてもらえたらな、なんて」

あーもう、何言ってるの私!

教室での二にの舞まいになるかもしれない。新入部員のくせに変な提案してんじゃねーよって思われたかな……。

「てか、いきなりすみません、スイーツと昔話なんて変な組み合わせですよね」

へらへらと笑って提案を引っ込めようとしたとき、

「いいじゃん」

^(d)ぐつと手首を掴むようにつなぎとめたのは、風羽ちゃんだった。

「たとえば、一日に何回かノのショートタイムみたいな感じで入れるとかどうですか?」

しょ、ショートタイム!? いや、そんな目立つつもりはないんだけど……。ちよつと待って、と止めるより先に、

「斬新ざんしん! 昔話って何だか逆に新鮮しんせんだな。みんなどう?」

想太郎が部長たちに投げかけた。私も恐る恐るおそおそみんなを見回すと……。

「色んな具をごちゃ混ぜしてハロハロなんだし、昔話もトッピングの一つだってことにしちゃえばいいんじゃない?」

まだ名前も覚えていないポニーテールの先輩が、何てことない調子で言った。

「ほんとですか……」

調理室を見渡してみると……。

目が合つてグッと親指を立てる人、頬杖をついたまま頷いている人、オムライスをまだもぐもぐしている人。

クラスメイトの斉藤さんは、胸の前で小さく拍手をしてくれていた。

ケチャップの香りの残る調理室にはのほほんとした空気が流れている。

そんな光景が、玉ねぎを切ってるわけでもないのに目に染みだ。

(こまつあやこ『ハロハロ』講談社)

※里美……のの花の母。

※一日カフェ……クッキング部は毎年、市民プレイス(公民館)で行われている縁日に、一日カフェを出店している。

※「漁師の娘」……フィリピンの昔話。入学式の日インフルエンザにかかってしばらく学校に行けず、友だちがなかなかできなかったのの花が繰り返し読んでいたもの。

※マグサリタでのノノカ……「マグサリタ」は、のの花が続いているオンライン英会話の教室。フィリピン人講師とのレッスンでは、学校での様子とは違い、楽しく会話ができる「ノノカ」でいられる。

問一

線部①「無理だよ、無理！」とありますが、おばあちゃんから突然、昔話の語り手にスカウトされたこの状況を「私」がどのように感じているか、たとえを用いて描写している部分を、本文中から十五字程度で抜き出して答えなさい。

問二

線部②「私は罪悪感を覆い隠すかのように質問をかぶせた。」とありますが、「私」の抱いている「罪悪感」についての説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア お願いを断られても笑顔に向けてくれるおばあちゃんを見たことで、おばあちゃんの昔話に対する強い思いを傷つけてしまったのではないかと後悔している。

イ 高校生になっても人前での発表に自信が持てず、おはなし会に出てほしいというおばあちゃんの希望を強く拒絶してしまったことにふがいなさを感じている。

ウ 一日カフェを行うという正当な理由があるとはいえず、部活動を言い訳にしておばあちゃんのお願いをそつげなく断ったことにうしろめたさを感じている。

エ おはなし会への参加を断っても、私が気にしないように笑顔を返してくれるおばあちゃんの優しさに甘えているのではないかと自分を責めている。

オ 昔話に強い思いを持つおばあちゃんのお願いを部活動を理由に断ったにも関わらず、おばあちゃんは私の活動を応援してくれることに申し訳なさを感じている。

問三

——線部③「そう話すおばあちゃんの声はまっすぐで迷いが無い。」とありますが、このときのおばあちゃん的心情や様子の説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の考えをためらうことなくの花に語っており、昔話が持つ強い力を心から信じている。
- イ 昔話の持つ力が必ず救いになると、どこか悩んでいるように見えるの花を説得しようとしている。
- ウ 人前での朗読をいやがるの花に、昔話の良さを強調しておはなし会に出てもらおうとしている。
- エ 自らも昔話に救われた過去の出来事を思い出しながら、昔話が持つ力を花に伝えようとしている。
- オ 昔話への自分の思いを語ることで、の花もその力をきつと理解してくれるだろうと期待している。

問四

——線部④「この二人、見た目も性格も対照的だけど息が合うみたいだ。」とありますが、この話し合いの場面から読み取れる二人の性格についての説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア よいものを作ればお客さんも喜んでくれるだろうと、単純に考えて実行しようとする想太郎に対して、矢崎先輩はあらかじめ計画を立ててから新しいことに挑む人物である。
- イ 部員の意見を取り入れながら新しい企画をおし進めていく想太郎に対して、矢崎先輩はその企画の実現に向けて細かい部分にまで気を配ることができる人物である。
- ウ ささいなことは気にせず自分のしたいことを最優先に考える想太郎に対して、矢崎先輩は企画が実現可能かどうかを慎重に考え、計画を上手く進めようとする人物である。
- エ 新入部員の意見も進んで取り入れるなど、仲間を信頼して仕事を任せる想太郎に対して、矢崎先輩は着実に企画を進めるために、不安な点は一人で解決しようとする人物である。

問五

——線部⑤「気づけば私は口を開いていた。」とありますが、それはなぜですか。分かりやすく説明しなさい。

オ 議論の途中でも話をささげり、強引に物事を進めようとする想太郎に対して、矢崎先輩は新入部員であるの花や風羽のことまで気遣ってくれる心優しい人物である。

問六

——線部⑥「そんな光景が、玉ねぎを切ってるわけでもないのに目に染みた。」とありますが、このときの「私」の心情を七十文字以内で説明しなさい。

問七
~~~~~線部(a)~~~~~(d)の表現の説明として適切なものには○、適切でないものには×で、それぞれ答えなさい。

- ア ~~~~~線部(a)は、物語の世界に没頭し、いつかおばあちゃんのような素晴らしい語り手になることを夢見て眠りにつくのの花の様子を表している。
- イ ~~~~~線部(b)は、気分が沈むような状況の中でも、初めて参加する部活動を心待ちにしているの花の、心はずむ様子を表している。
- ウ ~~~~~線部(c)は、部員のみんなからどのような反応が返ってくるかを不安に感じているの花の心情を、「……」を用いることで際立たせている。
- エ ~~~~~線部(d)は、自分の提案に自信が持てないの花を応援しようとするあまり、思わずの花の手を掴む行動に出た、風羽の強い気持ちを表している。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

シジュウカラは文を作つて会話する。僕ぼくの中では常識じょうしきだった。しかし、それを証明するには本当にたくさんの実験が必要ひつやうだった。

初めて気づいたのは修士課程一年の夏。軽井沢かるいざわの森でシジュウカラの子育てについて研究していた時のことだ。ヒナの数をかぞえようと、ある巣箱すこばに近づくと、背後から激しい鳴き声が聞こえてきた。

「ピーツピ、ピーツピ、ピーツピ・ヂヂヂヂ！」

親鳥が僕に威嚇いかくしているとすぐにわかった。大きな動物が自分たちの巣箱の前で何か怪しい動きをしているのだから、当然の行動だ。ヒナたちを守るため、僕を追い払はらうべきである。「ヒナの数をかぞえるだけだから……」と言いたい、そんな思おもいはシジュウカラに通じるはずもなく、僕は急ぎ足で巣箱を離はなれた。まんまと追おい払はらわれたわけがある。

離れてからも「ピーツピ・ヂヂヂヂ、ピーツピ・ヂヂヂヂ……」と警戒けいけいの声はしばらく続いた。その様子を観察くわんさつしていて、僕は「ハッ！」と気がついたのだ。この親鳥、二つの単語を組み合わせている！

それまでの観察から、シジュウカラの出す鳴き声のうち、いくつかについては、その意味がある程度わかっていた。「ピーツピ」と聞こえる声は、仲間に注意ちゅういを促うながす声。ハシブトガラスやオオタカなど、天敵てんてきになりうる動物を見つけた時に、「ピーツピー」と鋭すまどく発する。巣に近づいた人間やネコに対してもそう鳴くことがある。この声を聞くと、周りのシジュウカラは、どこに危険けんけんが迫せまっているのか確認かくにんすべく、左右に首をキョロキョロと動かす。無理やり人間の言葉にすると「警戒しろ」といったところだ。

一方、「ヂヂヂヂ」と聞こえる声は「集まれ」という意味だ。たとえば、群れの仲間を餌場えさばに呼ぶ時、よくこの声を出す。また、群れの仲間やつがい相手とはぐれてしまったシジュウカラも、この声を繰り返くりかし返かえし発する。実験的に、「ヂヂヂヂ」をスピーカーから流してみると、それを聞いたシジュウカラはすぐ音源おんげんに寄ってくる。

そういうわけで、「ピーツピ・ヂヂヂヂ」は「警戒して・集まれ」という意味だとすんなりと理解できたのである。二つの単語が連なった「二語文」といったところだ。

その後、研究を続ける中で、シジュウカラが「ピーツピ・ヂヂヂヂ」の組み合わせを他の状況じょうきやうでも使うことに気がついた。

それは、修士課程一年の冬のこと。餌場でシジュウカラの群れを観察していたら、近くにモズのオスが飛んできたのだ。モズは、体長二十センチほどの鳥だが、※小さな猛禽もうきんとの異名を持つ狩りかの名人。カナヘビやトカゲ、スズメなどを鋭い爪つめと嘴くちばしで襲おそう。普段は農耕地や公園など開けた草地くさぢにいるが、時々、シジュウカラの棲すんでいる森にもやってくることがあった。

そのモズは木の枝に止まると、尾羽おぼねをぐるりと回して、いよいよ狩りをしようという意気込みいききであった。「これは

マズい。みんな逃げろ！」と心の中で叫んだ瞬間、

X

シジュウカラ一羽では到底モズには敵わない。しかし、仲間と一緒に群がって、機敏な動きで威嚇すれば、森からモズを追い返すことができるのだ。これは鳥類学者がモビング (mobbing) と呼んでいる集団行動。本では読んだことがあったが、実際に目の前で見るとその迫力に圧倒される。

そして思った。やはり、「ピーツピ・チヂチヂ」は「警戒して・集まれ」という二語文で間違いない。モズなどの天敵を追い払うため、仲間を集める号令なのだ。

① これをいつか証明したいと、僕はずっと考えていた。なぜなら、多くの言語学者は、単語を組み合わせる力こそが人間に特有なものだと論じていたからである。

音声を組み合わせる動物はヒト以外にも古くから知られてきたが、それらは意味を持つ音声 (単語) の組み合わせとはいえない。たとえば、「ホーホケキョ」というウグイスのさえずりも、「ホー・ホ・ケ・キョ」という四音から成り立つが、それぞれの音に個別の意味があるわけではないのである。<sup>\*</sup> フレーズ全体として「縄張りの主張」という機能を持つものなのだ。より身近な例でいえば、「ウー・ワン・ワン」というイヌの声。これも、フレーズ全体として「威嚇」の意味。音は組み合わせられているものの、意味の組み合わせにはなっていないのだ。

だから、単語を組み合わせる文を作る能力こそが人間とその他の動物を隔てるものだという主張は、言語学者だけでなく、動物学者の間でも共通の認識だった。

しかし、シジュウカラの「ピーツピ・チヂチヂ」はそういうわけではない。意味を持つ二つの鳴き声組み合わせ

さっているのではないか。これはまさに「文」である。

僕はシジュウカラの作文能力の存在を証明するため、コツコツ研究を積み重ねていくことにした。

まずは、A 確認しなくてはならない。

そこで、シジュウカラの巣箱の前にホンドテンの剥製を置き、親鳥の行動を観察した。ホンドテンは卵やヒナを襲う天敵。親鳥たちは追い払わなくてはならないはずだ。たくさんの巣箱の前で実験を繰り返すと、結果は予想通り。ホンドテンの剥製を見たシジュウカラは、どの個体も「ピーツピ・チヂチヂ」と組み合わせたのだ。

さらに、モズとの遭遇時に「ピーツピ・チヂチヂ」と鳴くことも観察と実験で確かめた。シジュウカラがモズと遭遇した時に鳴き声を録音したり、餌台の隣にモズの剥製を置いたりして、それを見つけたシジュウカラが「ピーツピ・チヂチヂ」と鳴くことを確かめたのだ。

ホンドテンにもモズにも「ピーツピ・チヂチヂ」と鳴くことから、特定の天敵の種類を示す名詞ではなさそうだ。やはり「警戒して・集まれ」という号令になっているのだろう。

次に調べたのは、「ピーツピ・チヂチヂ」という声を聞いたシジュウカラが、「警戒」と「集まれ」の両方の意味を理解しているかである。もし、「ピーツピ・チヂチヂ」が「警戒して・集まれ」という二語文になっているならば、「ピーツピ」には警戒、「チヂチヂ」には接近、「ピーツピ・チヂチヂ」にはその両方の行動で反応するはずだ。

二〇一二年六月、巣箱を利用して繁殖した二十一つがいのシジュウカラに、録音した鳴き声をスピーカーから聞

かせる実験をおこなった。シジュウカラは通常、「ピーツピ、ピーツピ、ピーツピ……」、「ヂヂヂヂ、ヂヂヂヂ、ヂヂヂヂ……」、「ピーツピ・ヂヂヂヂ、ピーツピ・ヂヂヂヂ……」と同じ声を繰り返して鳴く。なので、自然な頻度（ひんど）でこれらの声が繰り返される音声ファイルを作成し、実験に使った。また、鳴き声を聞かせなかった時の普段のシジュウカラの行動を測定するため、鳴き声を含（ふ）まない背景音のファイルも用意した。まずは、「ピーツピ」と聞かせてみた。すると、シジュウカラは頭をキョロキョロと左右に振り、あたかも警戒対象を探すようなしぐさを示したのだ。やはり「警戒しろ」という意味になっている。

次に、「ヂヂヂヂ」と聞かせると、シジュウカラはスピーカーのすぐ近くまで近づいてきた。二メートル以内まで接近するのがほとんどだ。やはり「集まれ」という意味になっている。これは大学の卒業研究でも調べたが、思った通りの結果である。

そして、「ピーツピ・ヂヂヂヂ」の組み合わせ。この声を聞かせてみると、シジュウカラはキョロキョロと左右に首を振りながら、スピーカーに近づいてきたのである。「警戒と集合の両方の意味を認識している！」と僕にはわかった。もし本当にモズやホンドテンがいたら、追いついていくに違いない。

ここまでで、「ピーツピ」と「ヂヂヂヂ」が組み合わせると、その意味も合成されることがわかった。しかし、これ③で本当に「シジュウカラは文を作る」といえるだろうか？

人間は単語を組み合わせて文を作る時、ある文法のルールに従って単語を並べていく。そして、聞き手もそのルールに基づいて文の意味を理解する。もしシジュウカラの「ピーツピ・ヂヂヂヂ」が二語文であるならば、シジュウカラも人間のようにルールを使って鳴き声を組み合わせ、語順に基づいて意味を理解するはずだ。

思い返すと、シジュウカラは「ピーツピ・ヂヂヂヂ」とは鳴くが、「ヂヂヂヂ・ピーツピ」と鳴いたのは聞いたことがなかった。シジュウカラは「ピーツピ・ヂヂヂヂ」とは鳴くが、「ヂヂヂヂ・ピーツピ」とは鳴くが、「ヂヂヂヂ・ピーツピ」と鳴いたのは聞いたことがなかった。僕は、それまでに録音したシジュウカラの音声を再度確認してみた。だが、案（あん）の定（じょう）、「ピーツピ・ヂヂヂヂ」はあっても、「ヂヂヂヂ・ピーツピ」は見つからない。つまり、シジュウカラは「警戒↓集合」という語順のルールに従って、鳴き声を組み合わせているのである。

それでは聞き手のシジュウカラはどうだろうか。語順を認識して、意味を理解しているのだろうか？

そこで、二〇一五年秋、僕はもう一つの実験をおこなった。「ピーツピ・ヂヂヂヂ」を聞かせる場合と、反転させた「ヂヂヂヂ・ピーツピ」を聞かせる場合でシジュウカラの行動に違いがあるか調べてみたのだ。僕はいつもの軽井沢の森の中、シジュウカラの群れを見つけて、それら二種類の音声を聞かせていった。

「ピーツピ・ヂヂヂヂ」の再生音を聞くと、シジュウカラは首を左右にキョロキョロしながら音源に近づいた。以前に観察したのと同じである。一方、「ヂヂヂヂ・ピーツピ」と語順をひっくり返して聞かせると、首を左右に振る数（おほは）も大幅に減少し、スピーカーにもほとんど近づいてこなかったのだ。

合計三十四個の群れに実験したが、どの群れのシジュウカラもほぼ同じ反応だった。つまり、シジュウカラは語順を認識した上で「ピーツピ・ヂヂヂヂ」の意味を理解していることがわかったのである。

僕はデータを解析し、さっそく論文にまとめた。鳥だって文を作れる。これは、動物学や生物学にはとどまらない大きな成果に違いない。一流の総合科学誌、ネイチャー・コミュニケーションズ誌に投稿することにした。

およそ半年後、論文の審査結果が返ってきた。すべての審査員が「すごい研究！」と大絶賛。論文は見事受理され、掲載されることになった。

（鈴木俊貴『僕には鳥の言葉がわかる』小学館）

※猛禽……性質があらゆる、肉食をする鳥。  
※フリーズ……ことばのひとつきり。  
※案の定……思っていたとおり。

問一

Xに入る、以下のア～エの文を、文の意味が通るように適切な順番にならべかえ、記号で答えなさい。

ア そして、一、二分もすると、モズは「こりゃたまらん」と言わんばかりにどこかへと去っていった。

イ その声をきっかけに、シジュウカラやコガラ、ヤマガラなどが次々と集まってきて、モズの周りを取り囲んだ。

ウ 一羽のシジュウカラが「ピーツピ・チヂチヂ、ピーツピ・チヂチヂ……」と繰り返して鳴きだしたのだ!

エ そして、枝から枝へとすばやく飛び移り、左右の羽を交互にすばやくパチパチと上げ下げして、モズに威嚇を始めたのである。

問二

線部①「これ」の指す内容を二十字以内で答えなさい。

問三

線部②「多くの言語学者は、単語を組み合わせる力こそが人間に特有なものだと論じていた」とありますが、それはなぜですか。もっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 今まで、人間だけが意味を持つ音声を組み合わせた言葉を用いることができると考えられてきており、それ以外の動物がその力を持つと、人間との区別がなくなってしまふから。

イ 人間が発する音声も、必ずしもすべてが意味を持つものとは限らないが、意味のない単語を組み合わせたとしても、人間が作る言葉は意味を持つ音声の組み合わせになるから。

ウ 脳科学的に、言葉を操る能力を持つのは人間だけであり、動物が発する音声は音を組み合わせてある特定の意味を示すだけのものだと考えられていたから。

エ 人間以外の動物が発する音声は、音を組み合わせてフリーズ全体としてある意味を持たせているものでもあり、意味を持つ音声の組み合わせではないと考えられていたから。

オ 動物が発する音声と人間が発する音声を比較して考えてみると、動物が発する音の組み合わせの中にも、意味を持つ音声を組み合わせたものがあることが分かるから。

問四

Aに入る内容としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 天敵を追い払う号令として「ピーツピ・チヂチヂ」と鳴くシジュウカラがいるかどうか

イ 仲間の鳥に、警戒が必要なることを示すために「ピーツピ・チヂチヂ」と鳴くかどうか

ウ どのシジュウカラも天敵を追い払う号令として「ピーツピ・チヂチヂ」と鳴くかどうか

エ シジュウカラが、どのようなタイミングで「ピーツピ・チヂチヂ」と鳴いているのか

オ 「ピーツピ・チヂチヂ」と鳴いたとき、シジュウカラがどのような行動をとるのか

問五

線部③「しかし、これで本当にシジュウカラは文を作る」といえるだろうか?とありますが、筆者がこのように言うのはなぜですか。説明しなさい。

問六

この文章について述べたものとしてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア シジュウカラにも言葉があることを証明するために、筆者は人間やその他の鳥のコミュニケーションの取いかたを研究して、シジュウカラとの違いを明らかにした。
- イ 筆者は、シジュウカラのコミュニケーションの方法を明らかにし、人間が思い込みを捨てることで新しい発見が生み出されることを主張している。
- ウ 筆者は、複数の実験の結果の中からもっとも自分の説に近いものを選び出しながら、最終的に自分が立てた仮説が正しかったことを証明した。
- エ 筆者は、一つの実験から新たな課題を発見し、多くの実験を重ねながら自分の説を検証しており、信頼性のある結果を導き出している。
- オ あまりに膨大な量のデータは、複雑さを増し、かえって本質が見えにくくなるという一面もあるため、筆者は慎重に検証を進めた。

〔三〕

次の各文の——線部について、カタカナを漢字に、漢字をひらがなに、それぞれ直しなさい。

- ① コウテツのようにかたい意志を持つ。
- ② 消化キカンのはたらきを調べる。
- ③ ここは火気ゲンキンだ。
- ④ オサナイ妹の手を引いて歩く。
- ⑤ この庭は猫の額ほどのせまさだ。



